

津 都 建 第 520 号

平成 20 年 10 月 15 日

国土交通省道路局長 様

石川県津幡町長 村

隆



今後の道路行政についての意見・提案の提出について（回答）

平成 20 年 9 月 19 日付け国道企第 37 号にて依頼のあった標記については、別添のとおり提出しますのでよろしくお取り計らい願います。

道路は私たちの生活全般を支える最重要施設として位置づけられていることを、全国民が改めて認識し、プライオリティー（優先順位）を共有していく必要がある。まちの基盤づくりとしてのハード面というまでもなく、日本人の心の原風景といえる農村をイメージする上でも、道路を心（文化）の拠り所としておりソフト面での重要性も計り知れないことを、これまで以上に積極的にアピールしていかなければならないと考えられる。

さて、道路整備の必要性は、その土地に住むものには他には代えられないものである。それは、経済性や投資効率だけで論じられるものではなく、シビルミニマム（国民全体が等しく享受できる生活水準）として捉えていくべきである。現に、下水道事業は昭和50年代には全国の普及率が20%台であったが現在は70%台にまで向上してきている。これは、欧米諸国より立ち遅れた下水道を、国・地方が一体となり公共下水道・農村集落排水事業・合併処理浄化槽等の省庁の垣根を越えた整備計画の基、シビルミニマムとして事業を推進した成果である。

道路整備においても、段階的整備計画や優先順位、そして県道や市町村道との連携等を加味した明確なビジョンを提示して理解を求めていくべきである。特に、限られた財源を有効に利用していくためには、優先順位と段階的整備計画を公表し、ばら撒きの事業展開を厳に慎むことが大切である。ただし、優先順位の設定は国土の基幹道路の建設が主軸であることはいまでもないが、地方の要望も取り入れ、経済性や投資効率だけに頼るものではなく、その道路の持つ意義や将来のまちづくりにかかる重要性や発展性・展望を語れるものであるべきである。

折りしも、公共事業の事業費の低減化の中、創意・工夫による経済性の考慮は必要だが、あまりにも萎縮しグレードの低いものを建設すべきではない。やはり、住民にアピールできるものやデザインの面白いもの等を創る努力は必要であり、それが将来的には地元の誇りともなっていくはずである。また、維持管理費を低減するあまり、道路の路肩や法面の除草が以前に比較しあまり実施されず沿線住民の不評を招いていることを反省し、日常の維持管理に万全を期し住民サービスを向上させる努力をしている姿を見せていくべきである。

現在、少子高齢化を迎えた日本ではコンパクトシティという言葉の下に、投資効率を求めた施策が進められようとしているが、これでは、地方の特色を益々限定していくことになる。その土地ごとに都市形成の文化的背景や広域的な都市間における役割があり、一概に規制をおこなうべきではない。やはり、地方の特色や独自性に配慮した施策が必要である。

次に、維持管理についての重要性もこれまで以上に表明していかなければならない。道路は、住民にとっては、これまでは言わば空気のような存在であり、常に最良の状態であることを前提に生活が営まれてきている。また、それを保つことは日本中どこでも広く行政の責務であるとの認識から取り組んできたが、財源の確保に限界が見えてきており危機感を感じざるまでになってきている。

橋梁の耐震化や長寿命化に対する国の補助制度をさらに拡充し、維持管理全般に渡る補助制度の創設も必要と思われる。市町村の道路は毎年のように、延長が増大しており、それに対する管理費は暫減している。これでは、新規道路の整備どころか既設施設の能力も危ぶまれてきている。道路の衰退は、生活充足感を著しく低減させ、やがて集落や都市そのものの機能低下を招き、その先には文化までも衰退させかねない。事実、山間部の集落は経済性や効率性から取り残され、未整備な一本道でしかたどり着くことのできない所があり、積雪時には緊急車両の通行にも支障をきたしており防災上からも非常に課題が多い。国民が等しく安心・安全を享受しその土地の文化や多様性を守り伝え、そして住民自らが誇りをもち地域の未来を夢と希望を持って語ることができるような道路行政が必要である。

○現状

- 1、津幡町においては地域を結ぶ幹線道路として、国道8号や159号の整備が進んでいるが、町内における準幹線道路としての県道整備が進んでいないので、町内の道路ネットワークの構築が遅れており、均衡ある町づくりができない。
- 2、旧市街地における道路整備が進んでおらず新市街地との格差が生じてきている。
- 3、維持管理について
 - ・町道は毎年のように延長が増加しているが、それに見合う維持管理費が確保できない。
 - ・特に長大橋の維持管理(橋桁の塗装等補修)や耐震化が困難であり将来が不安である。
- 4、建設業が疲弊し、冬季の除雪委託業者が確保しづらくなってきている。
- 5、財源不足により、交差点や駅前等のスポット的整備(バリアフリー化や景観に配慮した高質舗装)ができない。

○課題

津幡町は、県都金沢市と隣接し市街地と山間部を併せ持つ歴史と文化の薫り高い町である。その文化は、山間地集落の持つ多様性により支えられてきているが、準幹線道路ともいえる県道の整備が遅れており、山間地集落の生活充足感が著しく低下している。県においても、財源確保が最大の課題となっており、地方道路整備臨時交付金制度も含め財源の確保・拡充が求められている。

旧市街地は、本来は町の顔ともいえる所であったが、道路整備が進展せず空洞化を招いている。経済性や効率性の優先は、町の中心市街地の衰退の原因ともなっている。

人口37,400人の地方都市の津幡町でも、町道延長は322kmもあり、毎年延長が増加している。舗装の修繕や街路樹の管理等を計画的に実施したいが財源は暫減している。

津幡町では、橋長約300mの長大橋を2本有しており、適切な維持管理が実施できないと、将来は通行止めともなりかねず憂慮している。

公共事業費の削減により、町近隣の建設業者が疲弊しており、建設機械を手放すと共に、廃業の動きも見られ冬季の除雪を依頼する業者が不足してきており、住民サービスの低下が懸念される。

第四次津幡町総合計画(H18～H27)において掲げた、“人に優しい道づくり”としてバリアフリー化等を実施したいが財源の確保に苦慮している。これは、スポット的整備として単年度で実施できるため住民に最もアピールしやすい事業であり、是非とも実施したいと考えている。

②-2 地域の目指すべき将来像

津幡町は石川県のほぼ中央部に位置し、県都金沢市に隣接することから現在でも人口増加の続く元気な町として発展しています。地勢的には加賀、能登、越中(富山)の分岐点という交通の要衝より、古くは宿場町としても栄えました。古代の北陸道の沿線より、多くの遺跡も発掘されています。現在でも、国道8号と国道159号の分岐点であり、それらが県道(旧国道8号)と共に環状線を形づくっており津幡町の骨格を形成しています。津幡町は、交通至便の町として注目され、石川県の副都心的な役割を担える町づくりを目指しています。古代から現代に至るまで、道路交通アクセスの改善と共に歩み発展してきたといえる典型的な町であります。

今後の津幡町の目指すべき将来像は、

① 国道8号と国道159号のさらなる整備促進

国道8号については国土の基幹道路として四車化を目指します。また、国道159号については、交通状況等の推移も勘案しながらさらなる車線数の増加(6車線化)の可能性を探ります。また、インターや出口ランプの改良によるスムーズな市街地への誘導を図ることを目指します。これらは近年、国道8号・159号は、東海北陸自動車道の全線開通と金沢地区外環状道路山側幹線の開通により直結され、全体の交通量の増大と大型車の混入率の増加による安全対策が必要になったためである。特に、県境に位置する国道8号の倶利伽羅トンネルは狭くて危険であり抜本的な改良を必要としている。また、石川・富山の両県(津幡町・小矢部市の両市町)の交流を阻害している一因ともいえる旧来のトンネル改良は最重要事項である。

② 国道8号と国道159号沿線における土地利用の促進

両国道の沿線では、さらに高度な土地利用の可能性があり、産業の推進として工業団地や商業施設の立地を推進する。また、沿線では石川県森林公園や源平の合戦で知られる倶利伽羅峠も有しており観光拠点の整備推進を図る。

③ 国道8号と国道159号へのアクセス道路の整備促進

特に、山間地域と国道とのアクセス道路の整備が遅れており、国道整備の恩恵を十分に享受できない地域がある。これは、山間地域の路線が所々で幅員狭小な区間を残しているが整備が促進されていないためである。積雪時や大雨等による土砂崩れの災害時には、陸の孤島ともなりかねず、人命にも関わることであり早急に解消する。

④ 人に優しい道づくりの促進

バリアフリー化の推進を始め、歩道舗装の高質化(透水性舗装や景観舗装)や街路樹の再整備等を進めることで、地域の特性を活かした個性や沿線の賑わいを創出し魅力ある景観整備を進め他都市との差別化を図る。

今後の道路行政についての意見・提案

様式 ④

③道路施策の重点事項(代表事例、期待する効果や評価等)

石川県 津幡町

○重点事項	○代表事例	○期待する効果や評価等	○その他
・地域活力の向上	国道 159 号の地域高規格道路としての整備	国道 159 号の地域高規格道路としての整備は、県都金沢市に隣接する津幡町の役割を高め、人口増加が続いている。また、商業施設の進出等により賑わいが図られ元気な町として評価されている。	さらに、車線数の増加やインターのランプ等の改善が必要
・都市交通の快適性、利便性の向上	東海北陸自動車道の全線開通と金沢地区外環状道路山側幹線の開通	東海北陸自動車道の全線開通と金沢地区外環状道路山側幹線の開通は、国道 8 号と 159 号へ直結したことで幹線道路ネットワークを形成した。	今後は、これら幹線道路とのアクセス道路を整備し、効果をさらに発現させたい
・良好な生活空間の確保と地球温暖化の防止	国道 8 号(通称津幡北バイパス)の開通	旧国道 8 号は、沿線に住居や工場等が混在し、沿線住民の交通安全対策に課題があった。また、信号等による車両の停車・発進が連続的に発生していた。現在の新道は、高規格で整備されアクセスがコントロールされており、旧来の課題が解決され、車両による二酸化炭素の排出量も軽減し、交通安全にも寄与している。	交通量や大型車の混入率の推移を注視し、四車化を目指したい。特に、倶利伽羅トンネルは狭く危険であり、安全走行確保のため改良が必要である。